

「国民と国との約束」

福岡市立高宮中学校

井熊 日奈子

福沢諭吉は、「学問のすすめ」の中でこう述べている。「政府は法令を設けて人々の生活や安全を守る。しかし、それを行うための多くの費用が政府自体にはないので、税金としてみんなに負担してもらおう。これは政府と国民双方が一致した約束である。」

私達が納めた税は、私達に恩恵として返ってくる。毎日通う、整備された通学路、勉強に欠かせない教科書や一人一台端末、友達と遊ぶ公園。当たり前と思える日常に、たくさん税が使われている。それは、国民と国との「約束」が成り立っているということだ。

私が住む福岡市では、令和六年一月から、子ども医療費の助成対象が高校生世代までに拡大された。入院は無料で、通院費の自己負担上限額は一医療機関あたり五百円とされる。ちょうど私も対象になる為、税の使い道を知る良いきっかけになった。そういえば以前、怪我をして病院に通っていたときも、硬貨一枚で済んでいたことを思い出した。少子高齢化が進む社会で、より多くの子どもが安心して医療を受けられることはとてもありがたい恩恵だと思う。

税はなくてはならないものだ。それなのに、なぜ税には負のイメージが強いのだろう。歴史の授業を受けていても、どの時代でも税は反乱のもとである。今も変わらず、消費税を上げるといふ話題が出れば、国民の大きな反発が起こる。ある時は、税金の無駄遣いなんて意見を聞く。調べてみると、北欧の国々では日本よりも税負担が重いにも関わらず、国民の納税に対する意識は軽いことが分かった。税がきちんと福祉のために使われているという実感があるため、「負担」ではなく「安心感」として受け取る人が多いからだそうだ。私達も「負担」の面ばかりではなく、もっと「恩恵」として受け取っている面に目を向けてみてはどうか。当たり前と感じすぎてそのありがたみに気付いていないかもしれない。せつかくの約束を、負担に思うだけなんてもったいない。

それでも、前向きなイメージを持ってない人がいるのも事実だ。それは、頑張っている納めた税の使い道をはっきりと理解できていないからではないか。約束をするなら、お互い対等な立場でありたい。そのためには、国が税の使い道を国民に納得してもらえようように知らせる必要があると思う。

税は、私達の日常を支えてくれている。税は、国との約束を成り立たせるために必要なもの。大人になったら今の日常の恩返しをするつもりで働いて、納税できる人になりたい。そして、この約束を後世につないでいきたい。